歴史総合-DX

**1930年①（昭和5）　昭和恐慌❷**

1930年（昭和5）は、関東大震災（1923）の発災から7年目にあたり、1927年（昭和2）の都市計画にもとづく東京市街の復興計画の成果が姿を現し、普及を始めた自動車の出現を前提に道幅が広くなり、1928年（昭和3）に最初に完成した「昭和通り」に続き、靖国神社に到る九段坂が自動車で登れるように緩やかとなって 「大正通り」（現・靖国通り）と命名、さらに東京初の環状道路の「明治通り」の大道路も姿を現すことととなり、この年に復興祭が行われた。また、従来は1丁目から3丁目までだった銀座の地番が、銀座の中心の尾張町が銀座4丁目と改称、「銀座」と通称されていた周辺32町が正式に銀座地番に統一されて銀座1丁目から8丁目までが誕生、4丁目には三越デパートも開店し、銀座中央通り沿いには「カフェー」が相次いで開店した。銀座をぶらりと散歩する「銀ぶら」の言葉が流行し、大阪でも心斎橋を散歩する「心ぶら」、神戸でも元町通を散歩する「元ぶら」が流行し、経済苦境の暗い世相を反映して「エロ」「グロ（グロテスク）」「ナンセンス」が流行した。一方、東北地方では大飢饉で娘の身売り話が問題となり、この年の1月に浜口内閣が賛 否あるなか実施した金解禁が施行されて、日本は金本位制に復帰したが、失業者が街にあふれる「昭和恐慌」の事態となり、格差社会の不満が社会に充満、11月には浜口雄幸首相が東京駅構内で地方出身の右翼青年に襲撃されるテロが発生した。浜口首相がその傷から死亡した翌1931年（昭和6）の全国の失業者数は470万人、失業率は6.68％となった。